

お珊瑚さんほりもの文身調べ

野村胡堂

—

「やい、ガラッ八」

「ガラッ八は人間きが悪いなア、後生だから、八とか、八公とか言っておくんなさいな」

「つまらねエ見得みえを張りやがるな、側に美しい新造でもいる時は、八さんとか、八兄哥あにいとか言つてやるよ、平常ふだん使いはガラッ八で沢山だ。贅沢ぜいたくを言うな」

「情けねえ綽名あだなを取つちやつたものさね。せめて、銭形の平次親分の片腕で、小判形の八五郎とか何とか言や——」

「馬鹿野郎、人様が見て笑つてるぜ、往来で見得なんか切りやがって——」

「へエ」

捕物の名人、銭形の平次と、その子分ガラッ八は、そんな無駄を言いながら、浜町河岸を両国の方へ歩いておりました。

逢えばつまらない無駄ばかり言っておりますが、二人は妙に気の合った親子分で、平次のような頭の良い岡っ引に取っては、少し脳味噌のうみその少ない、その代り正直者で骨惜しみをしないガラッ八位のところが、丁度手頃な助手でもあつたのでしよう。

「ところで、八」

「へッ、有難てえことに、今度はガラ抜きと来たね。何です親分」

「今日の行先を知っているだろうな」

「知りませんよ。いきなり親分が、サア行こう、サア行こう——て言うから跟ついて来たんで、時分が時分だから、大方『百尺』でも奢おごって下さるんでしよう」

「馬鹿だね、相変らず奢らせる事ばかり考えてやがる——今日のはそんな気のきいたんじゃないねえ」

「へエ——そうすると、何時かみたいに、食わず飲まずで、人間は何里歩けるか、お前に試させるんだ、てな事になりやしませんか」

「いや、そんな罪の深いんじゃないが——変な事を聞くようだが、手前、身体を汚したことがあるかい」

「身体を汚す？」

「文身があるかということだよ、——実は今日両国の種村に『文身自慢の会』というのがあるんだ」

「へエ——」

「これから覗いて見ようと想うのだが、蚤が螫した程でもいいから、身体に文身のない者は入れないことになっている」

「それなら大丈夫で」

「あるかい」

「あるかいは情けねえ、この通り」

袷の裾を捲つて見せると、成程、ガラツ八の左の足の踝くるぶしに筋彫すじほりで小さく桃ももの実を彫ほつたのがあります。

「ウ、フ、——その文身ほりものの方が情けねえ」

「そう言ったって、これでも蚤のみの螫さした跡よりはでかいでしょう。——一体そんなことを言う親分こそ身体を汚したことがありますかい」

「真似をしちやいけねえ」

「何べんも親分の背中を流して上げたが、ついぞ文身ほりもののあるのに気が付いたことがねえが——」

「そりゃア、手前てまえがドジだからだ、文身ほりものは確かにある」

「ちよいと見せておくんなさい」

「往來で裸になれるかい、折助おりすけやがえんじやあるまいし」

「見て置かねえと、何とも安心がならねえ。向うへ行つて木戸でも衝つかれると、
錢形の親分ばかりじゃねえ、この八五郎の恥だ」

「余計しんばいな心配だ」

無駄を言ううちに、両国の橋詰、大弓場の裏の一郭かくの料理屋のうち、一番構
えの大きい『種村たねむら』の入口に着きました。

「入らっしゃいまし」

「錢形の親分がお出でだよ」

「シッ」

大きい声で奥へ通すのを、平次は半分目顔で押えました。種村の前に世話人
が四五人、怪し気な羽織などを引っ掛けて、一々出入りの人の身体しらを調べて、

てがたがわ
手形代りに文身の有無を見ておりますが、平次は顔が売れているせいか、作法な肌を脱ぐ迄もなく、その儘木戸を通されて、奥へ案内されたのです。川に面した広間を三つ四つ打つこ貫いて、いかにも文身自慢らしいのが、もう五六人も集まっておりますが、平次は別段その中から人の顔を物色するでもなく、

「親分、石原のが来ていますぜ」

と袖を引くガラツ八を目で叱って、隅つこの方へ神妙に差し控えました。

二

ほりもの
文身というのは、もとは罪人の入墨いれずみから起つたとも、野蛮人やばんじんの猛獸脅もうじゅうおどしから起つたとも言いますが、これが盛んになったのは、元禄げんろく以後、特に宝曆ほうれき、明和、

寛政と加速度で発達したもので、平次が活躍して来た、寛永から明暦の頃は、まだ大したことはありません。

凶柄でもわかる通り、大模様の文身の発達したのは、歌舞伎芝居や、浮世絵の発達と一致したもので、今日残っている俱梨伽羅紋々という言葉は、三代目中村歌右衛門が江戸に下って、両腕一パイに文身を描いて、俱梨伽羅太郎を演じてから起ったことだと言われております。

この物語の時代には、文字や凶案めかしい簡単な文身が、漸く絵に進化しただけのことで、まだ、大模様やボカシ入や浮世絵風の精巧な凶柄はありません。しかし珍らしいだけに、世の中の好奇心の方は反って旺んで、こんな会を催すと、江戸中の文身自慢は言うに及ばず、蚤の蝥した跡のような文身を持っている人間までが、見物かたがたやって来るといふ騒ぎだったので。

やがて定刻の未刻が遅れて、申刻までに集まった者が九十八人、それに一々

籤くじを引かせて、番号順に肌を脱いで、皆んなに見せなければなりません。第一番は鳶とびの者らしい若い男で、胸へヒョットコの面を彫って、背中へはおかめの面が彫ってあります。まことにとぼけたもので、相当手がこんでおりますから、その時代の人には珍らしく、ワツと褒め言葉が掛りました。

次に出たのは、中間者らしい三十男。

「真つ平御免ねえ」

クルリと尻をまくると、両方の尻しりに蛙かえるとなめくじを彫って犢鼻禪ふんどしの三つの上に、小さく蛇がとぐろを巻いております。

第三番目に出たのは、背中へ桜の一と枝ひょうたんに瓢箪ひょうたん、寛政天保以後のように手のこんだ文身ほりものではありませんが、これもその時分の人の眼には、相当立派うつつに映ります。

こうして九十八人裸にして押し並べ、それへ世話人が等級を付けて、第一等

には白米が一俵、第二等には反物一反という工合に褒美を出す仕組み——その後、文化八年に一度、天保の御改革ごかいかくに一度、文身御法度ほりものごはつとになりましたが、大体この競技会の方は、維新近くまで頻繁ひんぱんに催されましたから、年を取った方で、今に記憶している方も少くないことでしょう。

ガラツ八くるふしの踝の桃などは、あまりケチなんで吹き出させてしまいましたが、不思議なことに銭形平次の文身ほりものは一寸当てました。肌を押し脱ぐと、背筋を真ん中にして、左右へ三枚ずつ、真田さなだの紋もんのように、六文銭の文身、これは何となく気がきいておりました。

さて、いよいよ九十八人全部裸体はだかになってしまつて、この日の一等は、胸から背へかけて、胴一杯に、狐きつねの嫁入よめいりを彫った遊び人と、背中一面おおつえに大津絵おしゑの藤娘ふしむすめを彫った折助とが争うことになりましたが、いよいよこれが最後という時、

「あつしのも見ておくんなさい」

パツと着物を丸めて、満座の視線の中へ飛込んだ男があります。

「何だ、無疵むきずの身体じゃないか。色が白いだけじゃ通用しねえ、退どいた退どいた」

世話人がかき退けるようにすると、

「俺の文身はこの下なんだ、諸人にひけらかすような安い絵柄えがらじゃねえ」

白木綿を一反も巻いたろうと思う新しい腹巻を、クルクルと解くと、その下から現われたのは真っ白な下腹部を三巻半も巻いて、臍へその上へ鎌首かまくびをヒョイトもたげて、赤い焰ほのおのような舌を吐はいている蛇の文身ほりもの。

「あッ」

九十八人の文身自慢で集まった人達も、思わず感歎の声をあげました。

見ると、白皙長軀はくせき、浪裡ろうりの張順ちやうじゆんを思わせるような好い男、一とわたり、一座

の騒ぎ呆れる顔をたそがれの色の中に見定めると、腹巻をクルクルと巻き直し

て、丸めた着物を小脇に掻い込むと、

「御免よ、あつしは忙しい身体なんだ。白米は後から貫いに来るぜ」

「あッ」

「待ちな」

と言う声を後に二階の縁側の欄干らんかんを越えると、庇ひさしを渡って、腹ん這いに雨樋あまどいに手が掛りました。

「御用ッ」

続いて飛付いたのは、先刻から虎視眈々こしたんたんとして、一座をねめ廻していた石原の利助、縁側へ飛出して、曲者の後ろから欄干を越えようとする前へ、

「ちよいと親分、私の文身ほりものも見てやって下さいな」

と立ち塞ふさがった者があります。

「えッ、邪魔だッ」

「あれさ、石原の親分。あんなヒヨロヒヨロ蛇より、もつと面白いものをお目
にかけようじゃありませんか」

絡からみ付いて、利助を引戻したのは、この店の女中とも、客ともつかぬ、変な
様子をしておりますが、二十二三の滅法美しい女。

「えッ何をしやがるんだ。手前てまえのお蔭で、大事な捕物を逃したじゃないか」
女を突き飛ばした利助。同じく屋根を渡って、下へ飛降りましたが、ほんの
暫く手間取るうちに、怪しい男はどこへ逃げたか、影も形もありません。

一方利助に突き飛ばされた女は、起き上がると思いの外ケロリとして、
「刺青ほりものがありさえすりゃ、女だって構やしませんわねエ」
少し媚こびを含んだ調子で、世話人の方へやって来ました。

「そりゃいいとも、お前さんを入れて丁度百人だ。皆んなこうして薄寒くなる
のに、裸になって待っているんだからお前さんにも肌はだぬ抜きになって貰わなきゃ

ならないが、承知だろうな」

「そんな事は何でもありやしません。なアに銭湯へ行つたと思や——」

女は自分を励ますようにそう言いながら、それでも少し含羞む風情で、肌を押し脱ごうとしました。

二百の瞳が、好奇心に燃えて、八方からチクチクするほど見張っている中、たそがれかけたとは言つても、まだ充分に明るい川添の広間で、不思議な女は、サツと玉の肌をさらしたのでした。

「あッ」

百人が百人、感嘆の声をあげたのも無理はありません。白羽二重に紅を包んだような、滑かな美しい肌に、彫りも彫つたり、

頸筋くびすじに鼠、左右の腕に牛と虎、背に龍と蛇、腹みに兔と馬——

上半身に十二支しの内、子ね、丑、寅、卯う、辰、巳み、午うまの七つまで、墨と朱の二

色で、いとも鮮かに彫つてあるのです。

女はさすがに身を恥じて、二つの乳房を掌に隠し、八方から投げかけられる視線を痛そうに受けて躓りました。

丁度そこへ、石原の利助は、広い梯子段を二つずつ飛上がるようにやって来たのです。

「女はどこへ行つた。余計な事をしやがるんで、到頭曲者を逃がしてしまつたぞ」

「ここにいるよ、石原の親分」

「あッ」

利助もさすがに立ちすくみました。息せき切つて飛込んだ鼻の先へ、匂うばかりに半裸体の美女、しかも、その上半身には、十二支の内、七つまで、羽二重に描いた藍絵のようあいえに見事な文身がしてあるのです。



「お前は何だ」

「女よ——少しお転婆てんぼだけれど」

「その文身ほりものは？」

「御覧の通り十二支さ、子ねから午うままで、あとの五つを見たかしたら面つらを洗って出直してお出で」

「何だと、女」

女はそう言ううちにも、肌を入れて前褌まえづまを直しました。

「反物は私が貰ったよ、皆さん左様なら」

小腰を屈めて、滑るように出ようとすると、

「待て待て、お前は先刻の野郎の仲間だろう、叩けば埃ほこりの出そうな身体だ。番所までちよつと来い」

と追いつがった利助、先へ廻って大手を拡げます。

丁度、その時でした。

「あッ、俺の紙入れがない」

「俺の羽織がねえぞ」

「大変、着物がなくなった」

という騒ぎ、九十八人悉く裸体になっているのですからその被害は大変です。

泥棒は多分、先刻の蛇の文身ほりものの男の騒ぎから、引続いて女の文身の騒ぎの間に仕事をしたのでしよう、全然裸まるつきりにされたのが二十二三人、あとの七十何人も何かしら奪られない者はない有様です。

三

「親分、一体ありやどうしたことです。九十何人裸にされるのを、銭形の親分

が黙っていると言う法があるものですか」

とガラッ八、種村たねむらの騒ぎを後にしての帰り道、あまりの事に平次に食ってかかりました。

「ハッ、ハッハッ、お前めえもそう思うか、いや面目次第もないと言いたいが、実は少しばかり心当りがあって、多分あんな事になるだろうと思っていたんだ」

「へエ——」

「だから、手前てめえにも着物や持物に気を付けろと言ったじゃないか。それに、人の言うことを空耳そらみみに走らせるから、平次の子分のガラッ八ともあろうものが、財布を盗まれるようなへまをやるんだ」

「まさに一言もねえ、あの中で一品ひとしなも盗られねえのは親分だけでしようよ。石原の親分が、煙草入れをやられたのは大笑いさ」

「馬鹿野郎、余計な事を言うな」

「へエ——、それはそうと、石原の親分が縛って行った、あの綺麗な年増が、矢張り曲者でしょうかね」

「そんな事がわかるものか、俺は小泥棒を挙げに行つたんじゃねえ。十二支組しぐみの残党ざんどうが、何人来るか見に行つたんだ」

「えッ」

「お前も知つてるだろう。一頃江戸を荒し廻つた十二支組、元は弱い者いじめをする悪侍やならず者を懲こらすつもりで、十二人の仲間が、銘々めいめいの干支えとに囚ちなんで、身体に十二支を一つずつ文身したんだが、だんだん仲間に悪い奴が出来て、強請ゆすり、かたり、夜盗やじりぎり、家後切やじりぎりから、人殺しまでするようになり、十二人別れ別れになつてしまったという話はお前も聞いている筈だ」

平次が案外シンミリ話し出したので、

「へエ——、二三年前に、そんな噂がありましたね」

ガラツ八も引入れられて、真面目に受答えをします。

「ところが近頃妙なことがあるんだ」

「へエ——」

「ちよいちよい人殺しがあるが、検屍けんしに立会って見ると、それが大抵たいてい十二支のうちの一つを、身体のどこかに彫ほっているんだ」

「へエ——」

「どうだ、この謎は解るかい」

「いいえ」

「感心したような顔をするから、解ったのかと思うと、何だ」

「叱ちつたっていけませんよ」

二人はそんな話をしながら、平次の家へ帰って来ました。

銭形の平次も、全くこの時ほど迷ったことはありません。近頃ひんびん頻々おこなと行われ

る、性の悪い押込、強盗、家後切は、どう考えても一二年この方のさばり返つた十二支組の仕業に相違ありませんが、その十二支組の仲間と思われるのが、斬られたり、絞られたり、水へ突っ込まれたり、この間から五六人も死骸になつて現われたのですから、十二支組が仲間割れしたか、それとも、第三者で義憤の士がそつと十二支組を片付けているとも思わなければなりません。

『文身自慢の会』に、十二支組の仲間らしいのは、蛇の文身の男より外には、一人も来た様子はありません。すると、あの上半身に十二支のうち七つまで彫つた美女、あの石原の利助に縛られて行つた女——というのは何だろう。

平次は腕を拱こまぬいて考え込んでしまいました。

「銭形の親分、ちよいとお顔を拝借さして下さいませんか」

磨き抜いた格子戸を開けて、慇懃いんぎんに小腰を屈めたのは、石原利助の子分で、清次郎という中年男、年は平次より大分上でしょうが、岡っ引の子分よりは商

人と言った感じのする、目から鼻へ抜けるような性たちの男です。

もつとも頭の良い平次には、少し勘定の合わないガラツ八が丁度いい相棒であつたように、石原の利助のような、年を取つた伝統主義の岡っ引には、こうした世才に長けた子分も必要だったのでしよう。

「お、清次郎兄イか、用事は何だ」

と平次。

「大変なことが起りました。ちよいと親分に八丁堀までお出になるように——と、笹野の旦那様のお言葉添すそで御座います」

藍微塵あいみじんの七三に取つた裾すそを下ろして、少し笑まし氣かたむに傾けた顔は、全く利助の子分には勿体ない人柄です。

「どうしたというんだい」

「へエ——、その、種村で捉つかまえた女を伴ともれて来て、改めて見ると、文身ほりものが半

分消えちまつたんで」

「あ、そんな事か」

「親分はもう御存じで——」

「知ってるわけじゃないが、大方そんな事だろうと思ったよ。実は俺もその術を用いたんだ。背中へ藍墨あいずみで、六文銭を描かいて行つたが、濡れ手拭てぬぐいで拭ふくと、綺麗に消えるよ」

「へエ——」

「すると親分の文身はペテンだったんですね」とガラッ八。

「当り前さ、俺は親から貰った生身なまみを汚すことなんか大嫌いだよ」

「へエ——」

二人の子分は全く開いた口が塞ふさがりませんでした。

「すると、あの女は、何の目当て、文身なんか描いたんでしょう？」

と清次郎、これは成程ガラッ八よりは事件の急所を知っております。

「それが解ってしまったえば何でもないんだが、まだ少しばかり解らないことがある——、笹野の旦那のお言葉なら、行かないわけには行くまいが、俺はもう少し考えを纏まとめたいことがあるんだ。すまないが清次郎兄イは、家の八の野郎を伴れて、一足先に行つて見てはくれまいか」

「へエ——」

「それから念のために言つて置くが、女の身体を濡ぬれ手拭でよく拭いた上、髪を解いて頭の地を見てくれ。頭の地に何にも変つたことがなきやア、あの女に用事はないが、万一あの頭に日いわくのある女なら、逃がさないようにつて、石原の兄イへそう言つてくれ」

「へエ」

四

二人の子分——清次郎とガラツ八は宙を飛んで八丁堀へ駆け付けました。

与力、笹野新三郎の役宅へ飛込んで見ると、女はまだ町奉行所には送らず、庭先にむしろ箆を敷いて、はだかろうそく裸蠟燭の下で、身体を拭かれております。

「不届きな女だ。ほりもの文身なんぞ描かきやあがつて、なんて事をするんだ」

四十を越した石原の利助が、濡れ手拭で、若い女の肌を拭いているのは、あまり結構な凶ではありません。

後ろ手にほんの形ばかり縛られた女は、灯影に痛々しく身をくねらせて、利助の荒くれた手に、遠慮会釈もなくぎょうし凝脂を拭かせております。

左には、またた瞬く赤い灯、右上からは、青白い月、女の顔も肌も、二色に照らし

分けられて、その美しさは言いようありません。赤い灯に照された方は、軽い苦惱ひきゆがに引歪ひきゆがんで、少し熱を帯びたように見えると、青い月に照された方は、真珠色に光って、深沈しんちんとしてすべての情熱よどが淀よどんで見えます。

笹野新三郎は、さすがに見るに忍びないか、面おもてを反けて月を眺めております。小者、折助手合は、物の隅、建物の蔭などから、好奇に燃ゆる眼を光らせて、この半裸体の女の、不思議なアク洗あきせんいを見物しておりました。

「恥はにかつ搔かきな女だ。何だつて又、こんな馬鹿な事をしたんだ。早く言うだけの事を申上げてしまつて、旦那様の御慈悲を願え」

「お前は、あの蛇の文身の男を知っているだろう、あれは十二支組の者と睨にらんだが、どこにいる何と言う者だ」

「フーン、物を言わないつもりだな、それもよかろう。自慢じゃねえが、俺は少しばかり腕が強いんだぜ。幸いお前の文身を洗い落とす序に、一皮剥いでやろうじゃないか、石原の利助を三助にするなんざア、お前に取っちゃ一代のほまれだ」

利助の左の手が女の丸い肩に掛ると、右手に持った濡れ手拭が、恐ろしい勢いで女の背から、肩から、腕を摩擦し始めました。

「あっ」

身をねじ曲げて、もがく女。

「えッ、動くとき当りが強いぞ」

ピシリと肩に鳴る利助の掌。

女の肩から腕から背へかけての皮膚——羽二重のような美しい皮膚——は、利助の恐ろしい力に擦り剥かれて、見る見る血がにじみ出して来ました。

「ウーム」

強情に堪える唇から、セイセイ漏らす息に伴れて、破れた笛を吹き続けるよ
うな、無慙むざんな悲鳴が、ヒー、ヒーと断続します。

「あ、これ利助——」

新三郎は見兼ねて手を挙げましたが、

「旦那、放つて置いて下さい。こうでもしなきゃア、素直に口を開く女じゃありません。——野郎、黙って見ていずに、塩しおでも持って来い」

利助は、振り返つてもう一人の子分にそんな事を言います。

丁度そこへ、ガラッ八と清次郎が飛込んで来ました。

「平次親分は後から参りますが、その前に女の髪を解いて頭の地を見て下さ
いって言いましたよ。頭の地にもなきьяア、唯の女だが、何か曰いわくがありや
大事な女だと言いましたよ」

とガラッ八、自分の親分は予言者のように心得ているだけに、こう言う声も何となく誇らしく響きます。

「よしッ」

利助は案外素直に答えて、女の乱れかかった髪の中から、元結もとゆいを探しました。子分に鋏はさみを持って来さして、嫌がるのを無理に切ると、丈なす黒髪が、サッと手に絡からんで水の如く後に引きます。

「えッ、ジタバタしたってどうにもなる場合じゃねえ、静かにしろ」

女の頭を膝の間に挟はさむように、乱れ髪を掻き分けて、蠟燭ろうそくの灯を近づけた利助、何を探し当てたか、

「あッ」

とたじろぎました。とたんに、蠟燭が斜ななめになって、蠟涙がタラタラと女の頬へ。

女は熱いとも言わず、凄婉せいえんな瞳を挙げて、世にも怨めうらしそうに、利助の顔を
見上げました。

「どうした利助」

新三郎も思わず縁側から降り立ちました。蠟燭の灯を中心に、女の頭の上に
顔を集めると、濃い黒髪ほりものの地に、藍色あいろに描えがかれたのは、紛れまぎもない一匹の鼠の
文身。

「お、お」

驚く新三郎の顔へ正面まともに、

「馬鹿にしちやいけねえ、十二支組のお珊姐さんあねご御だ。臭い息なんか掛けると罰が
当るよ」

桃色の啖呵たんかが、月下へ虹の如く懸かります。

その晩、錢形の平次が八丁堀へ駆け付け付けた時は、笹野新三郎の役宅は上を下への大騒動でした。

十二支組の女首領で、頭の地へ鼠の文身をしているお珊さんが誰の手を借りたか、見事に縄を切って逃げ出してしまったのです。

「平次、遅かった。大変な事になったぞ」

と笹野新三郎。さすがに役目の手前、奉行所へ送らずに自分の役宅やくたくから逃げられたでは申訳が立ちません。

「旦那、あの女が十二支組のお珊さんとわかれば、かえって筋が判然はつきりして来ました。御心配には及びません」

平次は大して驚いた様子もなく、いつもの平静な調子で、お珊さんが脱ぬけたとい

う縄の切目などを見ております。

「お前は何も彼も判っているようだが、少し話してはくれまいか」

「へエ——、何にも判っているわけじゃ御座いませんが、これだけは確かたしで御座います、十二支組の残党で、生き残っているのが、鼠の文身をしているお冊と、蛇の文身をしている巳み之吉のきちと、猪の文身をしている亥いた太郎たろうと三人だけです、その三人が、何か命がけの争いをしているらしゅう御座います」

「——」

「兎に角、お冊の隠れ家だけでも、直ぐ突きとめて参りましょう」

「どこへ行くつもりだ」

「なアに、あれだけの十二支を女の肌に描くのは、絵にしたって心得がなくっちゃ出来ません。あっしの背中へ六文銭を描いてくれた、人形町の彫辰ほりたつの顎あごを探ったら、大方女の住家の当りが付きましたよう、御免」

平次はフラリと八丁堀の役宅を出ました。人形町までは、若い平次の足では本当に一と走りですが、彫辰へ行つて聞いて見ると、さて、思ったように簡単には埒らちがあきません。

「そんな新造しんぞが来ましたよ。親方が六文銭を描かせて、お帰りになつた直ぐ後でしたが、何でも、お茶番をやるんだから、腰から上へ、七つだけ十二支を描いてくれ——とこう言う注文じゃありませんか、断る筋のものでもありませんから、二た刻ばかりかかつて念入りに描いてやりましたよ、——町廻は知りません、あんまり綺麗な女だからって、若い者が後で騒ぎましたが、この辺で見たことのない女で探しようがありません。だがね、親分、絵を描いただけでさえ、あんなにいい心持なんだから、こつちから金を出しても、あの羽二重のような肌へ、存分ぞんぶんな凶柄ずがらで彫ほつて見たいと思ひましたよ」

彫辰はこんな事を言いながら、名人らしく、蟠わだかまりもなく笑つております。

少し大きい口を利いて、笹野新三郎に別れて来た平次は、暫く去りも敢えず、彫辰の戸口で唸うなっておりました。

六

話は少し前後しますが、誰やらに縄を切り離されて、そつと物置から連れ出されたお珊さん、少し痛む身体を我慢して、導みちびかれるままに、そつと裏門を抜け出しました。ほんの一二町行くと、とある路地から、小手招きする者があります。疲れ果てたお珊は、それを疑う気力もなく、フラフラと入って行くと、突き当りは、一寸したしもたや、開け放したままの入口を入ろうとすると、後ろからパツと飛付いて横抱きにしたものがあります。

「あッ」

と驚く隙すきもありません。漸ようやく解いてもらった縄をもう一度掛け直したばかりでなく、今度は念入りに猿轡さるぐつわまで噛ませて引摺り上げます。こんな事をする位なら、最初から縄付のまま引張り出して来ればいい筈ですが、それでは人目に立つとでも思った細工でしょう。

奥へ担かつぎ込まれて、投り出すように引据えられたお冊さん、思わず四方あたりを見廻すと、目の前に坐っているのは細面に青髭あおひげの目立つ、一寸凄あつい感じのする若い男。

「お冊、久し振りだなア」

少し脂下やにさがりに銀煙管を噛んで、妙まがに含蓄がんちくの多い微笑を送ります。

「あッ、お前は亥太いた——」

驚くお冊、こう言ったつもりですが、猿轡さるぐつわを噛まされておりますから、もとより声は出ません。恐ろしい苦痛を忍んで、僅かに負けじ魂の眼を光らせませす。

「ウ、フ、思い出したか。どうだお冊、お前と俺との間には、まだ済まない勘

定がある筈だ。今晚は一と思いにそれを決めようと思つて伴つれて来たんだ。猿轡を噛ませちや気の毒だが、大きい声を出されると厄介だ。少しの間我慢をしてくれい？ 何？ お前は怒っているのか、——ハ、ハッハッ、猿轡が気に入らないんだらう、よしよし解いてやる。その代り、間違つても大きい声を出すと、一と思いに芋刺いもぎしだよ」

亥太郎はそう言いながら、立ち上がつてお冊の猿轡を解きました。もつとも、同時に脇差を一本、縛られたままのお冊の前へ置くことを忘れるような男ではありません。

「さア、これでよかろう。兎に角、あの八丁堀の組屋敷からお前を助けて来たんだ。俺はお前のためには恩人だ、少しは素直に言うことを聞いてくれるだろうな」

あたり周囲には誰もいません。親分に遠慮して皆な外へ出てしまったのでしよう。

亥太郎の執念深そうな青い眼だけが、お珊の美色に絡み付くように、その顔から、頸筋くびすじから、縛られた胸を見詰めております。

「お珊さん、手っ取り早く言おう、俺とお前は昔の仲間、三年前に別れ別れになって、今は十二支組もあるわけはねえが、俺はどうもお前めえが忘れられねえ——内々様子を探ると、お前は巳み之吉のきちと夫婦みたいに暮しているようだが、そりやお前りょうけん悪い了簡りょうけんだぜ。巳み之のはあれから身みを持ち崩くずして、泥棒、家後切、人殺しまでやるそうだ。言わば十二支組つらよこの面汚つらよこしさ。そんな悪い人間はあきらめて、俺のところへ来るがいい、近頃商法が当って、金も大分出来たから、お前に不自由させるようなことはねえつもりだ」

「お黙りッ」

お珊さんはたまり兼ねてこう言いました。

「何？」

「黙って聞いていりや何だとえ、巳みの之さんは泥棒や人殺しをするから、別れろッて、——馬鹿も休み休みお言いよ、泥棒や人殺しはお前の方じゃないか。その上、昔の十二支組の者が、自分の素姓すじょうを知っているのが恐ろしさに、お前は、仲間の者を片ツ端から殺して歩くつて言うじゃないか。誰がそんな鬼のような奴の言うことを聞くものか。私は十二支組のおおあねご大姐御でお前は一番の新米の亥太郎じゃないか、馬鹿も休み休み言わないと承知しないよ」

「少し声が高いぞ女、これが見えないか」

亥太郎はドギドギするのを取上げて、お冊の胸へピタリと付けました。

「さア、殺しておくれ、殺されたつて、お前なんかの——」

半分言わせず、亥太郎は飛付くように、もう一度猿轡さるぐつわを噛ませました。

「えッ、やかましい女だ。もう少し小さい声で物を言え、野中の一軒家じゃねえぞ」

「暫く考えさせてやる。明日になつても強情を張ると、お前ばかりか巳之吉の命はねえぞ」

「俺は彼奴あいつの巢を見届けているんだ。ちよいと笹野の旦那に教えてやりや、獄門ごくもん台だいに上る野郎だ」

お珊の美しい眼が、深怨しんえんと憤怒に燃えるのを亥太郎は面白そうに何時いつまでもいつまでも眺めております。

七

「親分、判った」

その翌日の夕刻、ガラッ八は転ころがるように平次の家へ飛込んで来ました。

「何が判った」

「情けねえな親分、しつかりしておくんなさい。一日と一晩あつしは寝ずに働いたんだ」

「ガラッ八、俺は寝ずに考えたんだ」

「考えたってこれが判るわけはねえ、足の裏に文身のある人間は親方——」

「シート、小さい声で言え」

「三人で手分けをして、八丁堀から両国まで、銭湯という銭湯を一軒ずつ歩いたんだ。どこの番台で聞いても、足の裏に文身ほりものをしている人間なんか、見たこともねえ——って言いましたぜ」

「それじゃ、わかったと言うのは何だ」

「どっこい話はこれからだ。一日と一晩歩き廻って、すっかり汗になって、町

内の銭湯へ行つて、何気なくその話をする、——どうだい親分、燈台下暗しだ、この町内にいるぜ——足の裏に文身をしてるのが」

ガラッ八の声は物々しく低くなります。

「誰だ」

「驚いちゃいけませんよ、石原の利助親分の一の子分、あの清次郎——」

「何、何だと」

平次はこの時ほど仰天ぎょうてんしたことはありません。それから笹野新三郎の役宅に飛込んで行つて、一刻とぎばかり密談をすると、何気ない様子をして、清次郎を呼出させました。

まさか悪事露見ろけんとも知らず、ノコノコやって来た清次郎を平次とガラッ八と二人で取つて押えるのに、どんなに骨を折った事でしょう。縄をかけて、足の裏を見ると、丁度土踏つちふまずのあたりに、ほんの一寸五分ばかりの小さい猪いのししが文身

してあったのです。弁解がましい事を言うのをその儘にして置いて、清次郎の家へ駆け付けて見ると、二三人の子分が、お冊さんを縛り上げて、責めせさいなんである最中、バタバタと縛り上げて、事情は一瞬の間に解決してしまいました。

十二支組の一人、亥太郎が、自分の悪事さまたの妨げになるので、素姓を知った昔の仲間を片っ端から殺しましたが、お冊さんの美色に未練があつたばかりに、とうとう最後の二人で躓つまづいてしまったのです。これだけの細工をしながら、一面は年恰好まで変えて、利助の子分として分別臭い顔をして来たので、どうしても捕らなかつたのは無理ないでしょう。

巳之吉の隠れ家も直ぐわかりました、これも亥太郎の手込てしじめに逢つて、九死一生の危いところを救われ、平次の取なしで少しばかりの罪はそのまま流してもらいました。

巳之吉が『文身自慢の会』へ出たのは、日蔭の身ながら、あの見事な蛇の文身が見せたかったためで、お珊はそれを察して彫辰に十二支を描かせ、『文身自慢の会』を騒がして、男の危急を救ったのでした。

平次は十二支組の秘密を読むことが出来なために、随分長い間苦勞しましたが、お珊の鼠が頭の地にあり、巳之吉の蛇が腹に巻き付いているのを推して、亥太郎の猪は足の裏にあるに相違ないという結論に到達したのでした。一つは十二支組の文身が、悉く人目に付かぬところにあつたのから思い付いたわけです。

文身発達史の最初の頁に、こうしたロマンスもあつたということをお話を話すが、この物語の目的です。巳之吉とお珊が、平次の情けで目出度く夫婦になつたことや、正業に就いて長生きをしたというような事は毛頭ここへ書くつもりはありません。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵—萩 柚月

初出—「文藝春秋オール讀物號」昭和六年十月号 文藝春秋社

底本—「錢形平次捕物全集」第一卷 河出書房 昭和三十一年五月五日初版

編集・発行 銭形倶楽部

お冊文身調べ



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>